

第 6 章 学生生活と課外活動

第1節 学生生活

1) 本学教育課程の特色

本学は、開学時より教養課程と専門課程の区分を設けずに4年あるいは6年一貫教育を実施してきた。平成3年、大学設置基準が大綱化され、各学部学科はそれぞれの教育理念と教育目標に基づいて自由に特色ある一貫教育カリキュラムを編成できるようになったため、教養教育と専門教育の連繋をこれまで以上に緊密なものにした一貫教育カリキュラムを編成した。

本学は、医学及び薬学を総合した特色ある教育及び研究の機関として、高度の知識を授けるとともに、時代の要請と地域社会の要望に応える有為な人材を育成し、併せて、医学、薬学の進展と社会の福祉に貢献することを目的としている。医学部医学科は、医師として、①豊かで温かな人間性、広い視野と社会的使命感を培い、②医学の基本的知識、技術、態度を体得し、③医学に対する全人格的関心と生涯にわたって学習を継続していく習慣を養うことを教育理念としている。医学部看護学科は幅広い教養と知識を身につけた資質の高い看護専門職の養成、さらに国際社会において十分に活躍しうる高度の専門的知識を身につけた人材の育成を教育目標としている。薬学部薬科学科の教育課程の特色は、教養教育と専門教育を有機的に結ぶ4年間の一貫教育を実施していることにある。また、薬学部と医学部及び和漢薬研究所からなる特色ある国立大学として、医薬共通の科目を設けることにより、病態と疾患及び和漢薬に対する知識を与えるとともに、医薬品の開発への志向意欲を伸ばすことを目指している。さらに、教育効果を重視した授業管理の一環として少人数教育の充実を図っている。

このような教育理念及び教育目標に基づいて、リベラル・アーツとしての教養教育の重要性を認識しつつ、教養教育と専門教育の連繋をより緊密なものにしたカリキュラムの編成を目指している。一方、科学技術の進展に対応できる専門性と総合性を育成するための教養教育を目指

している。

1. 教養教育

教養教育科目は人間文化科学、生命健康科学及び自然情報科学の3大学科目に分かれているが、「知的人間性の育成」と「基礎学力の向上」を目指し、①人間と社会や自然に対する鋭い観察力と洞察力に裏づけられた幅広い知性を養うこと、②生命に携わる医療人に必要とされる高い倫理観や総合的な判断力を育てること、③医看薬の専門教育に耐え得る基礎知識と倫理性を修得することを目的としている。

1) 人間文化科学は、さらに人社系と語学系に分けているが、人社系科目については、「多様な観点から人や社会を理解する」という目標を念頭に、同一科目が2年次でも受講できるように同時開講を行うとともに、類似分野の科目を異なる学期に配置するなど、多様性に配慮したカリキュラムを組んでいる。また、学期ごとの科目の多様性を確保するために、人文・社会科学系の基本を中心に学ぶ科目と、医療と人との関係を主なテーマとする科目をバランスよく配置している。また、語学系では、外国語能力の習得はなるべく集中的に行った方が良いとの判断から、英語、第二外国語ともそれぞれ週2回ずつ授業を行っている。すなわち、英語では講読と会話あるいは作文とリスニングを、第二外国語では基礎（文法）と実用（会話）を週ごとに並列して配置し、互いに補う形で実施している。

なお、少人数教育として、人社系についてはセミナーを開設し、語学系については、パソコンを利用したCALLセミナーを開設し、知的好奇心を育み学生の自発性やコミュニケーション能力・課題解決能力を高めている。

2) 生命健康科学は、「基礎学力の向上」という目的と深く関わる大学科目であり、入学後から専門教育への連続性に配慮した授業を行っている。また、①ヒトを含む生き物のあり方を多元的に捉える態度を陶冶するとともに、生体

活動及び生命現象の普遍性と多様性をマクロの個体レベル及びミクロの細胞・分子レベルで体系的・系統的に理解すること、②人の心理や行動の仕組みや成り立ちについて総合的に学習し、これらが人間関係に深く関わっていることを理解し、人の内面や外面の疾患と障害を科学的に受容できる知性と感性を修得すること、③生涯を通しての心身の健康の維持が図れ、障害者に対して人間性豊かな対応がとれる技能を修得することを目標としている。

3) 自然情報科学は、1年次に補充科目を開講し、以後、専門教育に至るまで段階的に学力を向上できるよう内容の連続性に配慮しながら授業を行っている。また、入学直後には、以降の学習に活用できるよう情報処理学でコンピューター演習を実施するなど、実用的な内容の授業を適切な学期に組み込んでいる。また、①様々な自然現象を対象として科学的な観察や考察を行い、自然現象には法則性が存在し、基本法則によって自然現象を統一的に記述できることを理解すること②数理的な観察力や考察力に基づいた自然現象の解析を通して論理的な思考力を陶冶すること③統計・情報処理の理論と方法を学習し、生命・自然現象を数量的に探求できる基礎能力を修得することを目標としている。

2. 専門教育

1) 概要

医学部及び薬学部においては、医薬の総合教育という立場から、医薬共通の授業科目を設けるとともに、医学科においては、特に病態論に基づく治療法の医学的・社会的問題点をより重点的に思考させ、さらに和漢薬に関する科学的知識を教授する。看護学科においては、あらゆる健康レベルにある人々への全人的、科学的アプローチを基礎にした看護学の知識を教授する。薬学部においては、従来おろそかにされていた病態と疾患に対する知識を与えるとともに、医薬品の開発への指向意欲を伸ばすことを目指している。

2) 授業内容

・医学部医学科

入学直後に医学科専門課程の講座を訪問し、

医学の領域に接したり、また、夏季休暇中に保健医療施設ないし福祉施設において4泊5日の介護体験実習を実施し、将来取り組む医療の幅の広さやチーム医療の大切さを学習する。

また、医学教育モデル・コアカリキュラムに基づき、臓器別に基礎と臨床の教員が相互に協力して統合的な教育を実施している。この中では、日常よくある病気を診断・治療できるために、人体の構造と機能、個体の反応人体各器官の正常構造と機能・病態・診断・治療、全身に及ぶ生理的変化・病態・診断・治療、医学・医療と社会、診療の基本を学習する。なお、講義や実習のほかに、少人数で、学生が自分で問題点を見つけ解決するチュートリアル形式の授業を取り入れることにより、医療人として必要な知識・技能・態度だけではなく、生涯自分で学習し問題を解決できる能力を身に付ける。

4年次終了時に実施される全国共用試験を経て、5年次では診療チームの一員として患者さんの診療に参加するクリニカルクラークシップによる臨床実習が行われる。6年次では県内の関連教育病院及び海外の医学校も含め、より深く6週間の実習が行われる。

・医学部看護学科

看護学科は、人間科学・基礎看護学、臨床看護学及び地域・老人看護学の3大講座からなり、人間科学・基礎看護学では、健康問題を持った人を全人的に把握するための知識と把握方法並びに人間理解を基盤にして、人への関わり方、健康問題を査定するために必要な情報の収集方法、情報をアセスメントして看護を必要とする事項の把握方法、看護計画のたて方、看護実施の方法と基本的な看護技術の使い方、看護の評価方法、看護展開の方法について学ぶ。

臨床看護学では、主として患者さんのベッドサイドを介して展開される看護活動について学ぶが、その中心は、心のケアといかに効率よく診療の介助や看護を行うかである。また、高度な医療機器の使い方を学ぶとともに、治療過程の介助を効率的に行い、治療効果をいかに高めるかという理論と技術を学ぶ。さらに、女性の出産育児の関心に注目し、健全な母子のあり方

を学ぶ。なお、助産師国家試験を受験するために、助産関係選択科目も開講している。

地域・老人看護学では、看護学の基盤に立つて公衆衛生活動を行う看護専門職としての保健師を育成することを目指して、その基本的な知識や技術について学ぶ。そのため、保健所や市町村行政が行う保健活動の場での実習や訪問看護ステーションでの実習を授業に組み込んでいる。また、学校保健・産業保健活動の基本についても学ぶ。なお、老人看護学においては、継続看護、在宅ケアに視点を当てた実習を行っている。

・薬学部

薬学部では、全国の薬学部共通の教育課程（モデル・コアカリキュラム）と本学独自の教育課程を提供している。モデル・コアカリキュラムには、教養教育科目、専門教育科目及び卒業研究がある。専門教育科目には、本学独自の科目として、医療人としての倫理観とコミュニケーションを体得するための「医療学入門」及び天然薬物や漢方医学の基礎を理解することを目標とした「和漢医薬学入門」があり、これらは医学科、看護学科学生との混成グループによる体験と実習を主体とした科目となっている。また、薬学部は医学部と密接な関係にあり、「東洋医学概論」「人体機能形態学」「疾病学・臨床医学」など、医学部教員による科目を多く開講している。

また、3年次には薬学英语を開講し、専門教育担当教員による専門科目の英語に関する少人数教育を行い、学生とのコミュニケーション及び薬学英语の充実を図っている。さらに、総合薬学演習を開講し、自分で学習し問題を解決できる能力を身に付けた後、数人単位で各研究室に配属され、卒業研究が実施される。4年次には、病院薬学実習が実施され、12月には卒業論文発表会が行われる。

2) 経済援助

イ. 奨学生

日本学生支援機構（旧日本育英会）は、独立行政法人日本学生支援機構法に基づいて平成16年4月に設立され、教育の機会均等に寄与する

ため学資の貸与その他学生等の修学援助を行うこと等により、次代の社会を担う豊かな人間性を備えた創造的な人材の育成に資することを目的としている。

本学におけるこの奨学生の推薦・選考は推薦基準に基づき、学部学生が学生委員会、大学院医学系研究科修士課程医科学専攻および博士課程学生は医学系研究科医学教務委員会、修士課程看護学専攻生は医学系研究科看護学教務委員会、薬学研究生は薬学研究科委員会と、それぞれの審議機関において行っている。

本学学生の平成17年8月現在の採用状況は、表1のとおりである。学生数に対する貸与者の比率は、学部学生で37.8%、大学院生は25.5%となっている。

貸与月額は、学部学生の第1種（無利子）については、平成7年度入学生が自宅生で38,000円、自宅外生で44,000円であったが、平成17年度入学生では自宅生45,000円、自宅外生で51,000円となっている。第2種（有利子）については、3万、5万、8万、10万の4種類から選択できる。

大学院生も第1種については、修士（博士前期）課程81,000円⇒88,000円、博士（後期）課程112,000円⇒122,000円となっており、学部学生及び大学院生ともに順次増額されている。第2種については、5万、8万、10万、13万の中から選択できる。

また、日本学生支援機構以外の育英奨学団体の採用者も数多く、平成7年度から現在までに本学が取り扱った育英団体の内訳は、表2のとおりである。

【授業料免除】

本学に第1期生が入学した昭和51年度当時の授業料は96,000円であったが、その後隔年ごとに改訂され平成7年度においては447,600円、平成9年度は469,200円、平成15年度及び16年度入学生は520,800円、平成17年度入学生については、年額535,800円となっている。

学生の奨学援助の一環として、授業料免除制度がとられているが、本学においても、この制度の適切な活用を図るため、学内規定を整備し、

表1 日本学生支援機構奨学金の貸与状況

区 分		学生数 17年5月現在	奨学金の種類		合 計
			第1種	第2種	
学部	医学部医学科	人 578	人 66	人 154	人 (%) 220 (38.1)
	医学部看護学科	260	30	52	82 (31.5)
	薬学部薬科学科	435	72	107	179 (41.1)
	計	1273	168	313	481 (37.8)
大学院	医学系研究科	183	13	2	15 (8.2)
	薬学研究科	197	45	37	82 (41.6)
	計	380	58	39	97 (25.5)
合 計		1,653	226	352	578 (35.0)

(外国人留学生を除く)

表2

奨 学 金 の 種 類
あしなが育英会
石川県奨学生
稲垣村奨学金
愛媛県奨学生
大阪育英会
帯広市奨学金
北御牧村育英会
北銀奨学会
岐阜県看護特別修学資金
岐阜県奨学金
岐阜県選奨生
矯正医官修学生
警視庁育英事業
公益信託日専連青森会創立50周年記念育英奨学基金
コカ・コーラボトラーズ育英会奨学生
鯖江市奨学金
鹿角市奨学会
電通育英会奨学生
鳥取県奨学金
富山医民連
富山県看護学生修学資金
富山県奨学生
富山県大学院奨学資金
富山母子福祉奨学金
中村積善会
新潟県大学奨学生
入善町山本奨学金
根上町奨学生
北陸ガス
母子福祉奨学会
三森良次郎奨学金
宮崎県育英資金
森下仁丹奨学会
吉田育英会
公益信託齋藤友二郎記念医学奨学基金
河内奨学財団

学生委員会において慎重に選考の上決定している。

本学における授業料免除は、前期分、後期分ごとに希望者を募り、学生委員会において、学業成績および経済面について規定に基づき選考の上決定しており、平成7年度からの免除者は、表3、4のとおりである。

ハ、学生生活実態調査

学生生活の実態調査は、本学学生がどのような状況のもとで生活しているか実情を把握し、今後の本学における学生の福利厚生、授業・研究環境等に反映させるため

の基礎資料を得ることを目的として、現在まで10回実施されている。

調査内容は、①学業、②住居・通学、③経済・生活、④福利厚生、⑤健康、⑥学生生活及び悩みと大きく6項目に区分して行われている。

今回は、平成14年度に実施した調査結果について平成6年度以降に調査した調査結果と比較してみる。

平成6年度の調査結果と比較してみると、一般的に顕著な変動が認められないものの、国民経済の悪化が少なからずも反映しており、経費の節約が見受けられる。

学業面では、授業への出席状況は非常に高く、教員に対して講義の充実とわかりやすい講義を望んでいる。

住居では、大学周辺の学生マンションへの入居者が多い。家賃は年々上昇傾向にある。また、通学方法では大学の駐車規制の強化もあり、自動車通学者がやや減少している。

現在の経済状況は、全体として余裕があるようにみえるが平成6年度からみても、普通と感じている学生が14ポイントも少ない4割弱である。これに反し大変苦しいとしている学生が5ポイント上昇し1割を超えており、経済の悪化が学生生活全体を少しずつ圧迫してきている。

福利厚生関係では、学生食堂の食事について

表3 学部生授業料免除者数

年 度	学 生 数			免 除 者						
	医	薬	計	前期	医学部		薬学部		合 計	
				後期	全額(%)	半額(%)	全額(%)	半額(%)	全額(%)	半額(%)
7	789	460	1,249	前期	30(3.8)	8(1.0)	20(4.3)	8(1.7)	50(4.0)	16(1.3)
				後期	41(5.2)	10(1.3)	19(4.1)	4(0.9)	60(4.8)	14(1.1)
8	849	452	1,301	前期	36(4.2)	9(1.1)	17(3.8)	5(1.1)	53(4.1)	14(1.1)
				後期	48(5.7)	8(0.9)	14(3.1)	6(1.3)	62(4.8)	14(1.1)
9	855	436	1,291	前期	43(5.0)	8(0.9)	21(4.8)	6(1.4)	64(5.0)	14(1.1)
				後期	48(5.6)	7(0.8)	21(4.8)	6(1.4)	69(5.3)	13(1.0)
10	847	428	1,275	前期	52(6.1)	15(1.8)	25(5.8)	8(1.9)	77(6.0)	23(1.8)
				後期	55(6.5)	11(1.3)	35(8.2)	7(1.6)	90(7.1)	18(1.4)
11	850	424	1,274	前期	57(6.7)	9(1.1)	26(6.1)	8(1.9)	83(6.5)	17(1.3)
				後期	57(6.7)	10(1.2)	29(6.8)	6(1.4)	86(6.8)	16(1.3)
12	849	433	1,282	前期	56(6.6)	11(1.3)	28(6.5)	7(1.6)	84(6.6)	18(1.4)
				後期	52(6.1)	14(1.6)	30(6.9)	4(0.9)	82(6.4)	18(1.4)
13	844	444	1,288	前期	39(4.6)	10(1.2)	25(5.6)	4(0.9)	64(5.0)	14(1.1)
				後期	37(4.4)	11(1.3)	24(5.4)	3(0.7)	61(4.7)	14(1.1)
14	838	440	1,278	前期	39(4.7)	1(0.1)	20(4.5)	3(0.7)	59(4.6)	4(0.3)
				後期	39(4.7)	1(0.1)	20(4.5)	3(0.7)	59(4.6)	4(0.3)
15	831	452	1,283	前期	35(4.2)	3(0.4)	18(4.0)	2(0.4)	53(4.1)	5(0.4)
				後期	38(4.6)	2(0.2)	17(3.8)	1(0.2)	55(4.3)	3(0.2)
16	837	440	1,277	前期	34(4.1)	11(1.3)	16(3.6)	4(0.9)	50(3.9)	15(1.2)
				後期	30(3.6)	14(1.7)	19(4.3)	6(1.4)	49(3.8)	20(1.6)

表4 大学院生授業料免除者数

年 度	学 生 数			免 除 者						
	医	薬	計	前期	医学研究科		薬学研究科		合 計	
				後期	全額(%)	半額(%)	全額(%)	半額(%)	全額(%)	半額(%)
7	85	100	185	前期	6(7.1)	0(0.0)	13(13.0)	3(3.0)	19(10.3)	3(1.6)
				後期	3(3.5)	0(0.0)	12(12.0)	6(6.0)	15(8.1)	6(3.2)
8	100	127	227	前期	11(11.0)	0(0.0)	19(15.0)	2(1.6)	30(13.2)	2(0.9)
				後期	11(11.0)	0(0.0)	19(15.0)	2(1.6)	30(13.2)	2(0.9)
9	122	132	254	前期	19(15.6)	2(1.6)	20(15.2)	2(1.5)	39(15.4)	4(1.6)
				後期	16(13.1)	1(0.8)	18(13.6)	2(1.5)	34(13.4)	3(1.2)
10	147	135	282	前期	21(14.3)	2(1.4)	18(13.3)	5(3.7)	39(13.8)	7(2.5)
				後期	19(12.9)	2(1.4)	19(14.1)	3(2.2)	38(13.5)	5(1.8)
11	144	151	295	前期	20(13.9)	4(2.8)	19(12.6)	2(1.3)	39(13.2)	6(2.0)
				後期	18(12.5)	3(2.1)	21(13.9)	4(2.6)	39(13.2)	7(2.4)
12	161	155	316	前期	11(6.8)	2(1.2)	21(13.5)	4(2.6)	32(10.1)	6(1.9)
				後期	14(8.7)	3(1.9)	19(12.3)	4(2.6)	33(10.4)	7(2.2)
13	173	174	347	前期	14(8.1)	4(2.3)	21(12.1)	2(1.1)	35(10.1)	6(1.7)
				後期	14(8.1)	4(2.3)	23(13.2)	3(1.7)	37(10.7)	7(2.0)
14	170	189	359	前期	11(6.5)	3(1.8)	14(7.4)	3(1.6)	25(7.0)	6(1.7)
				後期	12(7.1)	3(1.8)	13(6.9)	5(2.6)	25(7.0)	8(2.2)
15	187	190	377	前期	18(9.6)	4(2.1)	15(7.9)	3(1.6)	33(8.8)	7(1.9)
				後期	16(8.6)	4(2.1)	14(7.4)	2(1.1)	30(8.0)	6(1.6)
16	208	205	413	前期	16(7.7)	6(2.9)	14(6.8)	9(4.4)	30(7.3)	15(3.6)
				後期	13(6.3)	7(3.4)	16(7.8)	7(3.4)	29(7.0)	14(3.4)

() 内は、学生数に対する免除者の割合を示す。

以前より満足している学生が多くなってきているが、まだ5割強の学生が献立・味・質に不満を持っている。売店では、コンビニエンス的な売店の拡充を求めている。理容室の利用状況、施設に対する要望等では特に大きな変化はみられなかった。

健康面では、健康状態が良いと82%の学生が答えており以前の調査と特に大きな差はないが、精神的な悩みがやや増加している。

定期健康診断の該当日を休講措置したこともあるが受診率が96%と以前の調査からみても

と、20ポイントアップし自身の健康に対する意識が改善されてきている。

学生生活では75%の学生が満足しているとしている。不安や悩みについては勉強上についての悩みが一番多く、ついで将来の進路、自分の性格や能力、友好関係と続き、その対処方法については大部分が、自分で解決する、友人先輩に相談、家族に相談するとしているが、保健管理センター、学生課相談窓口への相談者が増加し続けていることからさらなる相談体制の充実が望まれる。

3) 保険制度 (学生教育研究 災害障害保険)

この保険は、文部科学省が、大学に学ぶ学生の被る種々の教育研究活動中の災害に対する被害救済の措置として検討してきた災害補償制度

表5 事故件数

年 度	学生数	正課中 (%)	学校行事中	課外活動中 (%)	キャンパス内 休憩(%)	合 計 (%)
平成 7	1627	1 (0.1)		17 (1.0)		18 (1.1)
平成 8	1679	4 (0.2)		14 (0.8)		18 (1.0)
平成 9	1669	1 (0.1)		17 (1.0)		18 (1.0)
平成10	1653	2 (0.1)		16 (0.9)		18 (1.0)
平成11	1650	1 (0.1)		10 (0.6)		11 (0.6)
平成12	1659			13 (0.7)		13 (0.7)
平成13	1667			18 (1.0)	1 (0.1)	19 (1.1)
平成14	1655	1 (0.1)		18 (1.0)	6 (0.3)	25 (1.5)
平成15	1660			25 (1.5)		25 (1.5)
平成16	1655	1 (0.1)		17 (1.0)		18 (1.0)

() 内は、学生数に対する被害者の割合を示す。

表6 事故内容

		平成 7	平成 8	平成 9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15	平成16	計
運 動 中	靱帯損傷・捻挫	6	14	7	9	5	3	8	8	17	13	90
	骨 折	5			5	2	5	6	2	3		28
	脱臼	1		6	1	1	1	1	2	2		15
	裂傷・挫創	4		3			1	3	5		3	19
	打撲			1		1	1					3
	眼の損傷											
	歯の損傷						1					1
	腰痛									1		2
	アキレス腱断裂						1		1	1	1	3
	その他	1			1	1				1		4
	計	17	14	17	16	10	13	18	18	25	17	165
実 験 実 習 中	切傷・裂傷・創傷	1	2		1	1			1			6
	火傷		1								1	2
	薬疹		1									1
	眼の損傷			1	1							2
	捻挫											
	その他											
	計	1	4	1	2	1			1		1	11
そ の 他	靱帯損傷											
	捻挫								4			4
	骨折							1	2			3
	計							1	6			7
	合 計	18	18	18	18	11	13	19	25	25	18	183

であり、財団法人国際教育支援協会（平成16年4月1日に内外学生センターから移管）が保険契約者となり、東京海上日動を幹事会社とする国内の損害保険会社6社との間に一括契約するもので、各大学は国際教育支援協会の賛助会員として、被保険者となる学生の本保険加入とりまとめの事務を行っている。

任意加入であるが、本学では、この保険制度の趣旨から全員加入を呼びかけており、新入生については100%が加入している。

補償の対象は、「被保険者が被保険者の在籍する大学の教育研究活動中に被った急激かつ偶然な外来の事故による身体の傷害」となっており、「教育活動研究中」とは、①正課を受けている間、②学校行事に参加している間、③①②以外で学校施設内にいる間、④学校施設外で大学に届け出た課外活動を行っている間となっている。

平成7年度からの事故件数及びその事故内容は表5、6のとおりである。なお、平成15年度における全国（加入者約278.5万人）の事故件数は10,135件で事故発生率は0.36%であった。

4) 福利厚生施設

イ. 食堂

昭和52年から、福利棟1階において、(財)学校福祉協会に経営を委託し、セルフサービス方式で運営されており、現在ホールの面積は453㎡、席数は390席で、8時15分から18時00分まで営業している。

昭和60年以降は、昭和61年にコーヒー自動販売機、平成4年に冷房装置が設置された。平成13年に定食類及び惣菜類の充実を図りそれとともに価格改定が行われた。

平成15年に談話室喫茶で、日替わり弁当や手作りサンドウィッチ、ハンバーガー等の販売を開始し、昼食時の混雑解消を図った。

昼食時の利用者数は、定食で現在1日平均1,300食を提供している。

ロ. 談話室、喫茶室

福利棟2階にある談話室（面接265㎡）には、約90席のソファ等が設置されており、テレビ、新聞、雑誌、囲碁・将棋等の設備を設け、学業

の合間の休憩や親睦にくつろいだ場を提供している。

喫茶室は、談話室に隣接して設けられ、昭和55年から(財)学校福祉協会の委託経営により運営されており、8時15分から18時まで営業し、1日平均400名が利用している。

ハ. 売店、理容室

売店は、昭和52年から福利棟1階部分（面積130㎡）で書籍、文房具については中田図書販売(株)が、また日用雑貨については(株)大和富山店の委託経営により運営され、8時30分から17時30分まで営業してきた。

平成12年3月(株)大和富山店が希望により撤退し、日用雑貨類は中田図書販売(株)に引き継がれた。

理容室は、厚生棟1階において昭和55年から瀬川孝勝氏の委託経営により運営されており、9時から19時まで営業している。

5) 健康管理

学生諸君の健康管理に関しては、昭和58年に保健管理センターが設置され、昭和59年からは本格的な活動を開始し、その任に当たってきた。

この保健管理センターの目的は、本学の学生（および教職員）の心身の健康保持・増進を図るためにセンターが附属病院と連携し、専門的業務を行うことにある。したがって、種々の疾患や悩みに対する指導・助言はもちろんのこと、健全な者の健康を維持または増進することも重要な目的としている。

次に具体的な活動状況につき示す。

イ. 学校医による健康相談及び処置

各種疾病の相談及び健康の維持・増進のため、センター専任（内科）、看護師及び専門の校医（神経精神科、整形外科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、皮膚科）が相談に応じる体制をとっている。また簡単な処置についても対応しており、いずれも多数の学生（及び教職員）に利用されている。

学生のセンター利用者は、延べ件数にして平成7年度の4,018件から平成16年度の5,825件と増加してきている。

センター利用者の区分では、呼吸器疾患（主

に風邪症候群)、消化器疾患が多く、それらについて創傷・熱傷、捻挫・打撲・関節痛などが受診の理由となっている。また、アレルギーに関するアンケート調査を開始してからは、アレルギー性疾患についての受診・相談が増加していることが特徴として挙げられる。これらの相談、処置に適切に対応できるように、設備の面でも年々充実させており、時代に即した対応を図っている。

ロ. 学生相談・心理相談

履修上の問題、将来の進路のこと、経済上の問題、その他さまざまな問題で悩むときには精神的にも不安定となり、種々の身体症状を伴うことも多い。主としてセンター教員、看護師が相談を担当するほかに、カウンセラーとしての心理学の教員にも応援を求めている。学務相談には、各学科の教務委員に協力願った。また、平成9年度から学生課に学生相談室が設置され、10年度に専門員1名が配置された。平成15年10月から臨床心理士1名(非常勤)が配置された。さらに平成17年度からは常勤の臨床心理士1名が配置され、相談体制の充実が図られている。

ハ. 健康診断

全学生を対象に、定期健康診断を毎年4月から5月にかけて実施している。実施項目は、内科、眼科、耳鼻科診察、血圧測定、尿検査、胸部X線撮影を行っている。健康診断の実施に休講措置を取り入れたことから、受診率が高くなっている。定期健康診断における有所見者に対しては再検査、診察が行われ、必要な場合には附属病院に精査を依頼している。また、定期健康診断のほかに、駅伝大会などの各種大会、山岳部夏山・冬山登山などのクラブ活動、スキー実習の際に臨時的健康診断を行っている。

ニ. 健康教育

定期に発行されている「学園だより」に、保健管理センターからのたよりとして毎回違ったテーマを取りあげ、わかりやすく解説している。また、全世界的に問題となっているエイズ(HIV感染)や実習に関連して関心の高い肝炎ウイルス、その他の感染症に関する講演会を、センター独自及び学内共同で行っている。

今後も学生諸君がより良き学生生活、課外活動ができるように、心身の健康管理の面からの支援を続けていきたい。

6) 研 修

イ. 新入生合宿研修

富山は海と山の自然に恵まれ、本学は遠く富山湾を望み、近く北アルプス連峰を目にした呉羽丘陵に立地している。創設以来本学では新入生合宿研修を実施し、早春の5月上旬、積雪の中を開通間もない立山室堂周辺で、学生・教職員が共にミニ登山を体験し、雄大な自然の懷に入って己が人間の小ささを悟り、自然と人間同士の出会いの場として語り合う機会としている。学生は全国から広く集まり、また地元出身者でも夏山はともかく、このころの厳しい春山の経験はなく、新入生には強烈な印象を与えるようで、卒業後も本学で学んだ良い思い出となっている。

往復の団体行動から宿泊中まで班別にリーダーを設け、学生に役目を分担させて自主協力活動を促し、晴天に恵まれれば屋外で雪中を国見岳や地獄谷へと歩き、スノーボードで斜面を滑り興じて十分に若さを発散し、室内においては、班別ごとのコンセンサスゲーム、班別討論など行いコミュニケーションの苦手な学生もあるので、自分の思いを相手に伝え、相手の意見を聞きながら合意を図り、生きる上での大切な試みを行い、自由時間も交え、両学部、学生・教職員の別なく互いに交流し親しく話し合う意義は大きい。

ロ. 在来生合宿研修

本学では、毎年12月に「合宿による共同生活と野外研修(スキー)等を通じて、大学生活から生じる諸問題について教職員とのコミュニケーションを深めることにより、より健全な学生生活と豊かな人間形成に資する」ことを目的として在来生合宿研修を開催している。

平成15年度まで毎年長野県山ノ内町の志賀高原ブナ平スキー場を中心に、学生約50名、教職員10名、特別講師1名が参加して行われ多大な成果をあげている。

平成16年度は参加希望者が少なく中止した。

第2節 課外活動

「正課」と「課外」は相互に深く影響し合っており、学生のキャンパス生活を形成している。

学生は正課と課外の両者によって学問的にも、人間的にも自立できるようになっていくと考えられる。

学生は自ら選択した課外活動の中で、親密な友人関係を見出し、社会人としての品性を養って人間形成を図っていくことができる。

大学としても、正課と課外を有機的に結びつける工夫と努力をしており、全学生に対して積極的にサークルに参加するよう指導している。また、活動の場となる施設の整備などに努めている。

以下に、平成17年度に届出のあった文化系と体育系のサークルの現状と、それぞれのサークルの最近10年間の活動状況を中心に記し、併せてスポーツ大会と医薬大祭（17年度から医学薬学祭）について述べる。

平成17年度の課外活動サークル数および加入学生数は次のとおりである。

サークル名	所属サークル数	加入学生数
体 育 系	26	918
文 化 系	16	383
合 計	42	1,301

(注) 複数加入を含む

1) 文化系サークル活動

各サークルとも、顧問教員がサークル活動全般にわたって指導助言を行っている。

学生自治会文化部会として、機関誌「竹林に座す」を年1回刊行している。

文科系サークルの活動の場としては、北陸3県大学学生交歓芸術祭（芸交祭）がある。

30の短大と大学が加盟しており、本学からは、軽音楽、管弦楽、邦楽部（三曲会）、美術、写真の各サークルが参加している。

①小児科訪問・青い鳥

昭和56年設立。顧問は宮脇利男先生。加入学生数48名。入院児童を楽しませるボラン

ティア活動から生まれたサークルである。小児科慰問、日曜学校の子どもたちとの交流を図っている。七夕会（附属病院小児科）、日帰りキャンプ（太閤山ランド）、打ち上げ合宿（浜黒崎キャンプ場）などを行っている。

②管弦楽団

昭和52年室内合奏団設立。昭和61年管弦楽団に編成替え。加入学生数64名。顧問は廣田弘毅先生。入学式での演奏、定期演奏会（第27回、小杉町文化ホール ラポール）、芸交祭（第55回、鶴来町総合文化会館クレイン）、病院コンサート（附属病院）、合宿（岐阜県上宝村）など活躍している。サークル誌「ESTRO ARMONICO」を刊行している。

③ギターマンドリンクラブ

昭和52年設立。顧問は北島勲先生。加入学生数36名。定期演奏会（第26回ラポール小杉）、北陸学生マンドリン合同演奏会（第33回、石川厚生年金会館）、附属病院コンサート、夏期合宿（長野県飯山市信濃平）を行っている。

④軽音楽部

昭和52年設立。顧問は布施秀樹先生。加入学生数24名。富山大学との合同定期演奏会、新歓コンサート、大学祭でのライブ、県内ミュージックフェスティバルに参加。合宿（北志賀）によって技を磨いている。

⑤コーラス部

昭和52年混声合唱団設立。平成16年コーラス部に編成替え。渡辺行雄先生。加入学生数16名。定期演奏会、他大学との合同演奏会を行っている。

⑥茶道部

昭和57年設立。顧問は福田正治先生。部員数20名。勉強会、練習、大学祭での発表会などで活躍している。

⑦邦楽部

昭和58年三曲会設立。平成14年邦楽部に編成替え。顧問は野村邦紀先生。会員数5名。

日本古来の楽器である琴、尺八、三絃を演奏するサークル。芸交祭、ゆかた会、大学祭における本学附属病院での発表会、病院コンサート（協立病院）に参加。

⑧写真部

昭和51年設立。顧問は古田勲先生。部員16名。写真展（年2回）や撮影会を開催している。

⑨緒鞭会

昭和49年設立。顧問は服部征雄先生。会員数69名。永い歴史を持つサークル。植物採集（5月、6月、7月）、文献輪読、夏合宿を行っている。20周年記念式典パーティーを実施。会誌「緒鞭」を刊行している。

⑩美術部

昭和51年設立。顧問は大谷修先生。部員数9名。作品の製作および鑑賞を行う。交歓芸術祭や院内展を開催している。

⑪ウインドアンサンブル

平成2年設立。顧問は畠山登先生。部員数26名。管弦楽団と異なり、楽器構成はほとんど管楽器である。附属病院ロビーで病院コンサート（3月）を開催して患者の皆さんに好評を得ている。

⑫アマチュア無線クラブ

平成元年設立。顧問は阿原稔先生。クラブ員数9名。アマチュア無線の健全な発展、会員相互の友好の増進、無線科学の向上を目的としている。JARL総会に参加、各種コンクールに出場。ALLJAコンテストでは北陸地区第1位であった。

⑬E・S・S

平成10年設立。顧問は濱西和子先生。クラブ員数9名。富山大学ESSとの合同で英語力向上のための練習を行っている。

⑭ボランティア同好会

平成8年設立。顧問は成瀬優知先生。クラブ員数9名。地域の福祉施設等の訪問をはじめとし、ボランティア活動を行っている。

⑮国際医療研究会

平成8年設立。顧問は鏡森定信先生。鎌田倫子先生。クラブ員数15名。スタディツアー、

国内施設見学を通して国際医療協力の実状を、勉強会を通して研究している。

⑯Joyful Company

平成14年設立。顧問は鎌田倫子先生。クラブ員数8名。本学留学生および外国人研究者との定例会等の交流。日本語ボランティアを行っている。

※なお、クラシックギター部、囲碁将棋部、富山リーガルクラブ、書道部、演劇を楽しむ会については、部員不足等で活動が停滞し、現在休部している。

2) 体育系サークル活動

各サークルとも顧問教員がサークル活動の活性化に努めている。学生自治会体育会では、機関紙「天放」を毎年1回刊行している。体育系サークルが参加する主な大会は、北陸地区国立大学総合体育大会（北国大会）、西日本医科学学生総合体育大会（西医体）および関西薬学生競技大会（関薬）である。北国大会は、北陸地区の国立大学（金沢大学、富山大学、福井大学、高岡短期大学、富山医科薬科大学）がクラブ活動を通して、相互の友好を深めることを目的としている。西医体は関西ブロックに属する44の医学部・医科大の体育系のサークルが一堂に会して、日頃鍛えた技を20競技で競い合う大会である。参加総人数は1万5,000人に達する。本学はこの大会で総合3位（第54回～55回大会）の成績を挙げている。

関薬は関西の薬学生だけの大会で、8競技が行われている。以下に各サークルのこの10年間の活動状況と平成16年度の現況を記す。

①弓道部

昭和51年設立。顧問は嶋田豊先生。部員数57名。北国大会：男子団体3位（54回大会）、団体女子優勝（56回大会）、団体女子3位（50回、54回大会）、男子個人戦優勝（51回、56回大会）、女子個人戦優勝（51回大会）西医体男子団体3位（55回大会）、5位（51回大会）、6位（50回大会）団体女子準優勝（56回大会）。

②剣道部

昭和51年設立。顧問は酒井伸也先生。部員

数24名。北国大会：女子団体4位（51回大会）。西医体：ベスト16（50回、52回大会）、関業男子団体優勝（平成12年、14年）4位（平成11年）、女子団体優勝（平成12年）、準優勝（平成10年、14年）個人戦優勝。

③ソフトテニス部

昭和51年設立。顧問は遠藤俊郎先生。部員数43名。北国大会：男子団体3位（50回、52回、53回、54回、55回大会）、女子団体準優勝（50回大会、51回大会）、3位（53回、54回、55回、56回大会）、西医体：女子団体優勝（45回大会）準優勝（44回大会）、3位（52回大会、ベスト8進出、女子個人優勝（46回大会）。関業：女子団体3位（平成10年度）。

④硬式庭球部

昭和51年設立。顧問は村口篤先生。部員数77名、北国大会：男子団体準優勝（53回大会）、女子団体3位（53回、54回大会）、西医体男子・女子団体ベスト16に進出。関業男子団体優勝（平成15年大会）、3位（平成14年大会）。

⑤サッカー部

昭和51年設立。顧問は西条寿夫先生。部員数37名、北国大会：優勝（52回、53回、54回大会）、準優勝（55回大会）、3位（56回大会）、西医体4位（55回大会）、ベスト8に進出。関業2位（平成13年大会）。

⑥水泳部

昭和51年設立。顧問は宮脇利男先生。部員数44名。北国大会：男子団体1位（47回大会）、女子団体3位（50回、51回、52回、53回、55回大会）、男女とも個人種目別で数多く優勝、入賞。西医体：男子：個人種目で優勝（54回、55回大会）。

⑦競技スキー部

昭和51年設立。顧問教員は石澤伸先生。部員数30名。西医体：男子団体総合優勝（50回、42回大会）、2位（52回大会）、3位（51回）、女子総合準優勝（50回、51回、52回大会）、男女とも個人種目別で数多く優勝。

⑧山岳部

昭和51年設立。顧問は小野寺孝一先生。部員数22名。春、新歓合宿（立山）、夏、夏山縦走、秋、もみじ狩り、冬、冬山登山。夏期の双六小屋診療所開設をサポート。

⑨準硬式野球部

昭和51年設立。顧問は塚田一博先生。部員数26名。北国大会：準優勝（51回大会）、3位（55回大会）、西医体に参加ベスト16（45回大会）、関業：1位（平成12年、14年大会）。

⑩卓球部

昭和51年設立。顧問は浦風雅春先生。部員数38名。北国大会：男子団体3位（51回大会）、女子団体3位（51回、52回大会）、西医体に参加、関業：男子団体準優勝（平成10年）、3位（平成11年）、女子団体3位（平成10年大会）、男子シングルス優勝（平成12年）、男子ダブルス優勝（平成12年）。

⑪男子バスケットボール部

昭和51年設立、顧問は山崎光章先生、部員数29名。北国大会：男子団体準優勝（56回大会）3位（50回～54回大会）、西医体：関業：3位（平成15年大会）、4位（平成10年大会）。

⑫女子バスケットボール部

昭和51年設立。顧問は山崎光章先生。部員数17名。北国大会：準優勝（46回、55回大会）、3位（50回、51回、53回～56回大会）、西医体：ベスト8、ベスト16関業：3位（平成10年、11年大会）。

⑬バドミントン部

昭和51年設立。顧問は瀬戸光先生。部員数64名。北国大会：女子団体優勝（55回大会）、3位（54回、56回大会）、男子団体3位（50回、51回、54回、56回大会）、西医体：男子団体3位（56回大会）男子団体ベスト16、女子団体3位（53回、55回大会）、ベスト8、ベスト16、シングルス優勝（54回大会平成12年）、女子ダブルス準優勝（52回大会）、全業大会：男子団体優勝（平成13年、14年、16年）、女子団体優勝（平成13年、16年）、男子団体準優勝（平成10年、11年）、女子団体準優勝（平成10年、15年）、女子団体3位（平成14年）。

⑭男子バレーボール部

昭和51年設立。顧問は白木公康先生。部員数26名。北国大会：準優勝（50回大会）、3位（51回～54回、56回大会）、西医体：2位（52回、54回大会）、3位（51回大会）、4位（55回大会）、関薬大会：優勝（平成12年大会）、3位（平成10年、11年大会）。

⑮女子バレーボール

昭和52年設立。顧問は井上博先生、白木公康先生。部員数26名。北国大会：3位（50回～53回、56回大会）、西医体：3位（53回大会）、4位（52回、～46回大会）、関薬：優勝（平成16年）、2位（平成10年）、3位（平成12年、13年、14年大会）、5位（平成11年大会）。

⑯ハンドボール部

昭和51年設立。顧問は早坂征次先生。部員数24名。北国大会3位（51回、56回大会）、西医体：8位（50回大会）。

⑰ヨット部

昭和53年設立。顧問は渡辺行雄先生。部員数21名。北国大会：総合準優勝（55回大会）、3位（50回～52回、54回、56回大会）、西医体：総合2位（53回大会）、4位（52回、55回大会）、5位（51回大会）、9位（50回大会）、470級優勝（53回大会）その他各級ごと種目に入賞。

⑱ラグビーフットボール部

昭和51年設立。顧問は笹原正清先生。部員数42名。北国大会：優勝（51回大会）、準優勝（50回大会）、3位（52回、56回大会）、西医体：ベスト16位（51回大会）。

⑲陸上競技部

昭和51年設立。顧問は広川慎一郎先生。部員数68名。北国大会：男子総合2位（55回大会）、3位（51回～54回大会）、4位（50回大会）、女子総合3位（51回大会）、4位（50回、52回、53回大会）、個人種目優勝（50回～56回大会）、西医体：男子総合3位（54回大会）、4位（53回大会）、7位（51回、52回大会）、女子総合優勝（53回、54回大会）、3位（52回大会）、5位（51回大会）トラック部門優

勝、準優勝、男女とも個人種目別で数多く優勝、鈴木賀代さんが第9回個人部門として最優秀賞敢闘賞、第10回個人部門として最優秀賞が授与された。関薬：その他種目ごとに数多く優勝、準優勝（平成16年大会）。男子総合優勝（平成14年、15年大会）、男子総合準優勝（平成13年大会）、男女総合準優勝（平成15年、16年大会）、女子総合3位（平成12年大会）、フィールド優勝（平成15年、16年大会）、男子トラック優勝（平成15年）、男子トラック準優勝（平成16年）

⑳合気道部（富山医科薬科大学養神館合気道部）

昭和60年設立。顧問は片桐達雄先生。部員38名。西医体：オープン参加（41回大会）、演武・団体1位（54回大会）、演武・個人段外の部1位（54回大会）、女子総合優勝（54回大会）。

㉑ウインドサーフィン部

昭和61年設立。顧問は古田勲先生。部員数39名。週2回練習、学連レースや一般レース参加に向けて頑張っている。

㉒女子軟式野球部

昭和60年設立。顧問は平賀紘一先生。部員数22名。第2回および第3回全国大学女子軟式野球大会で準優勝（昭和63年および平成元年）。第18回全国大学女子軟式野球大会ベスト8。春季・秋季北陸大会にも参加。

㉓武田流中村派合気道部

平成15年設立。顧問は谷口美樹先生。部員数30名。武田流中村派合気道の稽古をつうじ、心身の練磨、人格の形成を行う。同派の大会に参加している。

㉔ITF テコンドー部

平成15年6月設立。顧問は岩岡研典先生。部員数18名。テコンドーをとおして精神・肉体的修練のための活動を行っている。

㉕フットサルサークル

平成17年6月設立。顧問は矢倉隆之先生。部員数26名。フットサル種目をとおして学生間の交流を深め、他団体との交流試合に出場するため頑張っている。

②⑥ダンス部

平成15年4月設立。顧問は木村友厚先生。部員数20名。大学祭でのパフォーマンスをするため、他のイベントに参加することを目的にダンスを楽しんでいる。

なお、応援団、体操・新体操部、柔道部、空手道部については、部員不足等で活動が停滞し、現在休部している。

3) サークルリーダー研修会

サークル活動は学生の自主性に委ねられており、そのため、サークルの組織と運営において民主的なルールが確立していない。また、各サークルにおいては、部員相互の人間関係は緊密であり、組織に対する帰属感も強いが、反面セクト化傾向も強い。このような点を補うためには、サークル各リーダーとしての資質の向上とリーダーシップの向上が望まれる。学生課が世話役となって毎年8月に文化系と体育系の各サークルのリーダーを集めて、このための研修を行っている。学内外の講師による講演会と体育系と文化系それぞれで個別討論会をもっている。

4) 大運動会及び春季・秋季スポーツ大会

いずれも体育会事業局が企画・運営している。大運動会では学生と教職員の多数が参加し盛会裏に行われている。

春季・秋季スポーツ大会は各サークル、医学部医学科と薬学部薬科学科の各学年aチームとbチームおよびサークルごとのチームによって競われる。競技種目は、ソフトボール、バレーボール、テニス、綱引き、リレー等がこれも盛会裏に行われている。

5) 医薬大祭

毎年10月末の金・土・日の3日間行っており、平成16年度で28回を数える。その内容は、医薬展、看護展、附属病院展、民族薬物資料館一般公開、スポーツ大会、フリーマーケット、軽音ライブ、医薬大名人戦、大学祭記念学術講演会、医薬大オープン（硬式テニス）、後夜祭などである。各サークルが屋外出店（模擬店）している。平成16年度の学術講演会は医学部・附属病院助講会主催で、夏川周介氏（長野県厚生連佐久総合病院長）が「卒後研修と地域医療の実際」と題して開催された。

第3節 卒業生の動向

1) 医学部医学科

昭和57年3月に第1回生75名が卒業して以来、平成17年3月卒業の第24回生まで、計2,281名（うち女子540名；全体の23.7%）が卒業した。

卒業生は、いまや医学・医療における教育、研究、診療の各分野で全国的に活躍しており、医学部の基礎ならびに臨床では本学出身の教授が、4名誕生し先頭に立って母校の発展に貢献している。

これまでの卒業生の進路状況を表示した。

この24年間で大学院進学者136人（全数の6%）、就職／研修医2,014人（88.4%、そのうち県内42.8%）、その他127人（5.6%）となっている。

進路のうち就職／研修医をみると、開学後数年間では、助手として本学に勤務し、大学の創成期に貢献したことがわかる（昭和56年5名、57年2名、60年3名、61年1名、その後不定期）。また、就職／研修医の大部分を占める研修医については、本学で研修を行う者の割合は30～50%であり、必ずしも高いとはいえない。この状況は他の新設大学も同様で、大学附属病院や臨床講座の診療、研究、地域医療への貢献の面からも問題となっている。なお、本学出身

者で他大学、あるいは他県の病院へ行くのは、ほとんどが郷里に戻る、いわゆるUターン者である。

医学科では卒業生の母校への定着率を高めるため、卒後教育検討委員会を置き、6年生を対象とした卒後教育ガイダンスを行うとともに、アンケート調査等を行ったりして、鋭意検討を重ねている。

また、附属病院では卒後臨床研修、とりわけその最も基本となる初期研修の効果を高めるべく、平成6年度から臨床研修委員会が中心となり卒後研修プログラム（「卒後研修の手引き」）を作成し、卒業生により魅力ある研修の場を提供するよう努力してきた。この間平成16年度には2年間の卒後研修が義務化された。研修受け入れ病院として、大学以外の施設も認定されたことから、16年3月の卒業生の進路として、県外の病院での研修を選択する者が急増した（平成16年3月の卒業生ではその38.5%にあたる35名が県外での卒後研修を開始した）。このような状況に対応すべく卒後研修センターを設置し、関連病院と連携しながら、本学附属病院における卒後研修の充実を図っている。

医学部医学科進路状況

年度	進 路			合 計	就職先（病院）	
	進学（%）	就職（%）	その他（%）		県内（%）	県外（%）
7	5（5.1）	84（85.7）	9（9.2）	98	50（59.5）	34（40.5）
8	2（2.3）	79（90.8）	6（6.9）	87	35（44.3）	44（55.7）
9	5（5.0）	89（89.0）	6（6.0）	100	37（41.6）	52（58.4）
10	2（2.3）	78（89.7）	7（8.0）	87	43（55.1）	35（44.9）
11	0	84（96.6）	3（3.4）	87	45（53.6）	39（46.4）

年度	進 路 別 内 訳							合 計
	本 学		他 大 学		一 般 病 院		その他 (%)	
	研修医 (%)	大学院 (%)	研修医 (%)	大学院 (%)	県内 (%)	県外 (%)		
12	57 (58.2)	1 (1.0)	32 (32.7)	0	0	3 (3.1)	5 (5.1)	98
13	38 (38.4)	0	43 (43.4)	0	1 (1.0)	10 (10.1)	7 (7.1)	99
14	40 (41.7)	0	35 (36.5)	2 (2.1)	0	13 (13.5)	6 (6.3)	96
15	29 (32.2)	0	34 (37.8)	0	3 (3.3)	18 (20.0)	6 (6.7)	90
16	24 (26.4)	0	21 (23.1)	0	3 (3.3)	35 (38.5)	8 (8.8)	91

医学部医学科追跡状況；人数（％）

年度	進学率	就職／研修	最 掲；県 内 分	その他	合 計
昭和56	20 (26.7)	55 (73.3)	38 (50.7)	0 (0.0)	75 (100)
57	12 (11.8)	88 (86.3)	46 (45.1)	2 (2.0)	102 (100)
58	12 (13.0)	80 (87.0)	39 (42.4)	0 (0.0)	92 (100)
59	11 (10.8)	87 (85.3)	46 (45.1)	4 (3.9)	102 (100)
60	17 (17.0)	83 (83.0)	39 (39.0)	0 (0.0)	100 (100)
61	5 (5.4)	87 (93.5)	36 (38.7)	1 (1.1)	93 (100)
62	2 (2.6)	74 (96.1)	34 (44.2)	1 (1.3)	77 (100)
63	5 (4.4)	95 (84.1)	43 (38.1)	13 (11.5)	113 (100)
平成1	12 (12.1)	86 (86.9)	42 (42.4)	1 (1.0)	99 (100)
2	4 (4.0)	83 (83.8)	48 (48.5)	12 (12.1)	99 (100)
3	5 (5.7)	73 (83.9)	40 (46.0)	9 (10.3)	87 (100)
4	4 (3.6)	98 (87.5)	44 (39.3)	10 (8.9)	112 (100)
5	5 (4.7)	94 (87.9)	42 (39.3)	8 (7.5)	107 (100)
6	5 (5.6)	78 (86.7)	32 (35.6)	7 (7.8)	90 (100)
7	5 (5.1)	84 (85.7)	50 (51.0)	9 (9.2)	98 (100)
8	2 (2.3)	79 (90.8)	35 (10.2)	6 (6.9)	87 (100)
9	5 (5.0)	89 (89.0)	37 (37.0)	6 (6.0)	100 (100)
10	2 (2.3)	78 (89.7)	43 (49.4)	7 (8.0)	87 (100)
11	0 (0.0)	84 (96.6)	45 (51.7)	3 (3.4)	87 (100)
12	1 (1.0)	92 (93.9)	57 (58.2)	5 (5.1)	98 (100)
13	0 (0.0)	92 (92.9)	39 (39.4)	7 (7.1)	99 (100)
14	2 (2.1)	88 (91.7)	40 (41.7)	6 (6.3)	96 (100)
15	0 (0.0)	84 (93.3)	32 (35.6)	6 (6.7)	90 (100)
16	0 (0.0)	83 (91.2)	27 (29.7)	8 (8.8)	91 (100)
合計	136 (6.0)	2,014 (88.4)	974 (42.8)	127 (5.6)	2,281 (100)
各年平均	5.7	83.9	40.6	5.3	94.9

2) 薬 学 部

本学部は、地元の伝統産業である「富山のくすり」の振興を目的として、明治26年（1893）に設立された共立富山薬学校に始まる。その後、市立富山薬学校（明治30年、1897）、県立薬学専門学校（明治43年、1910）、官立富山薬学専門学校（大正9年、1920）、戦後の学制改革に伴う富山大学薬学部（昭和24年、1949）と名称変更とともに発展してきた。また、昭和38年（1963）には新制大学として初めて大学院薬学研究科が設置された。昭和50年（1975）には、新設医学部、和漢薬研究所とともに富山医科薬科大学創設に参加した。昭和53（1978）年には、富山医科薬科大学大学院薬学研究科に博士課程、平成12年（2000）には大学院薬学研究科に臨床薬学専攻が新設された。薬学部は、創設以来112年の伝統と歴史を誇り、これまでに医療業界、

製薬企業、公官庁など薬学に関連する広い分野に多くの優秀な人材を送り出してきた。また、平成11年（1999）より大学院博士課程後期に社会人学生を受け入れ、社会人の再教育にも貢献している。富山医科薬科大学薬学部卒業生ならびに大学院薬学研究科修士の動向を次頁の表に示す。

1. 薬学部

本学部は創設以来、約9,000有余名の卒業生を世に送り出してきた。富山医科薬科大学の卒業生は、昭和54年度（1979）から平成6年度（1994）までの16年間に1,506名に達し、940名（62％）が就職、462名（31％）が大学院に進学し、65名（4％）が病院等の研修生になった。就職先についてみると、製薬会社（49％）、病院（26％）、公務員（11％）、薬局・流通（8％）の順であり、製薬会社に就職する学生が圧倒的

進路状況

区 分		卒業年度	就 職							大学院進学	研修生・研究生	その他	合計
			病 院	薬局・ 流通	製薬会社	その他製造	公 務	そ の 他	計				
薬学部	昭和54年～ 平成 6 年度	(208) 242	(52) 76	(338) 459	(11) 17	(64) 104	(36) 42	(709) 940	(91) 462	(28) 65	(20) 39	(848) 1,506	
	平成 7年度	(18) 21	(7) 11	(4) 9	1	(2) 5	2	(31) 49	(22) 51	(1) 2	(4) 9	(58) 111	
	平成 8年度	(19) 23	(15) 25	(6) 8	(1) 1	(5) 7	(4) 9	(50) 73	(17) 44	(1) 2		(68) 119	
	平成 9年度	(14) 16	(16) 22	(3) 7		(3) 3		(36) 48	(16) 48		(4) 7	(56) 103	
	平成10年度	(15) 19	(19) 30	(2) 3		(1) 2		(37) 54	(13) 47	(3) 4	(1) 3	(54) 108	
	平成11年度	(15) 16	(14) 24	(2) 4		(1) 1		(32) 45	(19) 53	(2) 2	(3) 5	(56) 105	
	平成12年度	(6) 10	(13) 19					(19) 29	(25) 59		(5) 8	(49) 96	
	平成13年度	(8) 11	(17) 24		(1) 1			(26) 36	(17) 58	(2) 2	(3) 7	(48) 103	
	平成14年度	(3) 4	(15) 24	(2) 2				(20) 30	(25) 61			(45) 91	
	平成15年度	(3) 5	(3) 13	(3) 4		(1) 1		(10) 23	(28) 83	(1) 1	(4) 6	(43) 113	
	平成16年度	(4) 4	(12) 24	(1) 1	(1) 1	1		(18) 31	(25) 66	(1) 1	(6) 10	(50) 108	
	計	(313) 371	(183) 292	(361) 497	(14) 21	(77) 124	(40) 53	(988) 1,358	(298) 1,032	(39) 79	(50) 94	(1375) 2,563	
大 学 院 薬 学 研 究 科	前期課程	昭和54年～ 平成 6年度	(9) 22	(1) 3	(36) 302	(2) 18	(15) 33	(4) 10	(67) 388	(15) 84	(5) 8	(6) 11	(93) 491
		平成 7年度	(6) 7	1	(2) 10		1		(8) 19	(3) 7	(1) 1	(1) 1	(13) 28
		平成 8年度	(5) 5	(3) 3	(4) 15	1	2	(3) 3	(15) 29	3	1	(4) 10	(19) 43
		平成 9年度	(8) 11	(4) 10	(4) 16		(2) 3		(18) 40	(4) 9		(2) 3	(24) 52
		平成10年度	(4) 6	(1) 6	(5) 19	1	(2) 2		(12) 34	(1) 8	(2) 3		(15) 45
		平成11年度	(3) 4	(1) 5	(8) 32		2	(1) 1	(13) 44	(3) 6	1		(16) 51
		平成12年度	(1) 8	(1) 3	(4) 19	(3) 6	(3) 5		(12) 41	(4) 8		(3) 3	(19) 52
		平成13年度	(4) 8	(1) 6	(8) 17	(3) 9	1		(16) 41	(1) 7		(1) 3	(18) 51
		平成14年度	(9) 17	6	(9) 13	6	(3) 8		(21) 50	(3) 11	(1) 1	(3) 4	(28) 66
		平成15年度	(3) 6	(3) 9	(2) 22	(1) 4	(2) 2		(11) 43	(4) 11	(1) 2	(3) 7	(19) 63
		平成16年度	(3) 5	(3) 6	(3) 10	(6) 12	(1) 5		(16) 38	(3) 17		3	(19) 58
		計	(55) 99	(18) 58	(85) 475	(15) 57	(28) 64	(8) 14	(209) 767	(41) 171	(10) 17	(23) 45	(283) 1,000
	後期課程	昭和55年～ 平成 6年度			(1) 18		(1) 5	(12) 41	(14) 64		5	(2) 10	(16) 79
		平成 7年度			1		1	(1) 3	(1) 5			2	(1) 7
		平成 8年度			2		1	(6) 6	(6) 9				(6) 9
		平成 9年度			2			(2) 8	(2) 10				(2) 10
		平成10年度					1	(1) 8	(1) 9		(1) 2		(2) 11
		平成11年度		(1) 1	2			(2) 6	(3) 9				(3) 9
		平成12年度		2	1		10	(5) 10	(5) 13				(5) 13
		平成13年度			2		2	(1) 4	(1) 8			5	(1) 13
		平成14年度			1		3		4			(4) 8	(4) 12
		平成15年度			(1) 3		(1) 2	(2) 4	(4) 9			(6) 10	(10) 19
		平成16年度	1		2		(1) 3	(1) 3	(2) 9			(4) 7	(6) 16
		計	1	(1) 1	(2) 35	1	(3) 18	(33) 93	(39) 149	5	(17) 44	(56) 198	

製薬会社には化学工業を含む。
就職欄のその他は、帰国し就職した者を含む。
その他は、社会人・ボスドク・帰国等。

() は女子で内数

就職地

区分		卒業年度	富山県内	北陸	その他中部	北海道	東北	関東	関西	中国	四国	九州	外国	合計
薬学部	昭和54年～平成6年度	(301) 352	(76) 87	(104) 134	(5) 8	(12) 22	(116) 190	(66) 110	(7) 11	(10) 12	(12) 13	1	(709) 940	
	平成7年度	(11) 13	(3) 5	(5) 7	(3) 4	(1) 2	(4) 10	(1) 2	(1) 1	(1) 2	(1) 3		(31) 49	
	平成8年度	(18) 26	(4) 6	(8) 14		(2) 2	(11) 14	(3) 3		(2) 2	(2) 3		(50) 73	
	平成9年度	(8) 8	(6) 7	(6) 9	(1) 1	(3) 3	(6) 9	(4) 7	1	(1) 1	(1) 2		(36) 48	
	平成10年度	(4) 6	(5) 5	(15) 19	(1) 1	(2) 3	(6) 13	(2) 4	(1) 1		(1) 2		(37) 54	
	平成11年度	(4) 6	(2) 3	(12) 14	(1) 1	(1) 2	(7) 10	(4) 5	(1) 1		1	2		(32) 45
	平成12年度	(7) 8	(3) 5	(2) 3	(1) 1		(4) 7	2				(2) 2		(19) 29
	平成13年度	(3) 3	(4) 4	(8) 9		(2) 3	(2) 4	(5) 6	(1) 1			(1) 5		(26) 36
	平成14年度	(6) 8	(1) 2	(1) 3	(1) 1	(2) 2	(8) 9	(1) 1		(1) 3		1		(20) 30
	平成15年度	(1) 4		(4) 7		(1) 2	(4) 6	3						(10) 23
	平成16年度	(8) 8	1	(2) 9		(1) 2	(4) 6	1	(1) 2	(2) 2				(18) 31
	計	(371) 442	(104) 125	(167) 228	(12) 21	(27) 44	(172) 278	(86) 144	(12) 19	(17) 23	(20) 33	1	(988) 1,358	
大学院薬学研究科	前期課程	昭和54年～平成6年度	(29) 91	(2) 11	(8) 26	3	3	(21) 162	(5) 81		(1) 8	2	(1) 1	(67) 388
		平成7年度	(4) 7		(4) 6	1		3	1		1			(8) 19
		平成8年度	(4) 8	(1) 3	(2) 3	(1) 1		(2) 6	(1) 4			(1) 1		(12) 26
		平成9年度	(3) 6	(3) 3	(3) 8	2	1	(5) 11	(4) 6	2		1		(18) 40
		平成10年度	(3) 10	(1) 1	(1) 3	1		(4) 13	(3) 6					(12) 34
		平成11年度	(6) 13		(3) 8		(1) 3	(2) 11		1	1	(1) 2		(13) 44
		平成12年度	(3) 6	3	(1) 3	1	1	(4) 15	(3) 9	2		(1) 1		(12) 41
		平成13年度	(5) 9	(1) 2	(1) 4		(2) 3	(3) 13	(4) 9	1				(16) 41
		平成14年度	(2) 9	2	3	(1) 3	(5) 7	(7) 14	(3) 8		1	(3) 3		(21) 50
		平成15年度	(3) 9		(1) 5		(2) 3	(4) 19	(1) 7					(11) 43
		平成16年度	(4) 10		(3) 5			(5) 14	(3) 7			(1) 2		(16) 38
		計	(66) 178	(8) 26	(27) 74	(2) 12	(10) 21	(57) 281	(27) 142	6	(1) 11	(7) 12	(1) 1	(206) 764
	後期課程	昭和55年～平成6年度	(7) 16		2			9	5			5	(7) 27	(14) 64
		平成7年度	1					2					(1) 2	(1) 5
		平成8年度	1		1				1					3
		平成9年度	2		1			1					(2) 6	(2) 10
		平成10年度			1			1			7	9	(1) 1	(1) 1
		平成11年度	(1) 2		(1) 1			1	2				(1) 3	(3) 9
		平成12年度	2					1					(5) 10	(5) 13
		平成13年度	3					1					(1) 4	(1) 8
		平成14年度	3					1						4
		平成15年度	(1) 1					(1) 3	1				(2) 4	(4) 9
		平成16年度	2					3			(1) 1		(1) 3	(2) 9
		計	(9) 33		(1) 6			(1) 23	9		(1) 1	5	(21) 66	(33) 143

北陸は、富山県を除く
 その他中部（愛知、静岡、三重、岐阜、新潟、長野）

（ ）は女子で内数

に多い時代であった。また卒業生に占める女性の比率は56%であった。

最近10年間の卒業生の進路状況を見ると、いくつかの変化が見受けられる。まず、大学院進学者が増加し、最近では60~70%の卒業生が進学している。これは、企業での研究・開発職に就くためには大学院博士課程前期修了以上の学歴が望まれていること、平成18年度(2006)より薬学部が6年制に移行することなどが影響していると思われる。就職先については、製薬企業(9%)が大きく低下し、医薬分業が進んだ結果、薬局・流通(51%)がほぼ半数を占めるまでになった。最近では、卒業生に占める女性の比率は低下してきており、50%を切っている。このことは、薬剤師としての仕事が社会に認識されてきたこと、資格がとれる(薬剤師免許)こと、就職に強いことなどにより、男性の入学者が増加したためと思われる。

2. 大学院

昭和53年(1978)の大学院博士課程創設以来、1,000名の博士課程前期(修士課程)修了生を送り出した。平成6年度(1994)までの修了者491名のうち、388名(79%)が就職し、84名(17%)が博士課程後期に進学した。就職先の多くは製薬会社(78%)であり、次いで公務員(9%)、病院(6%)、薬局・流通(1%)の順であった。また修了生に占める女性の比率は19%であった。

一方、最近10年間の修了生の進路状況を見ると、博士課程後期への進学率はほぼ横ばいである。就職先については、製薬企業(46%)に就職する学生の比率が多いものの、低下している。一方、病院(20%)、薬局・流通(15%)は大きく増加している。これは、大学院進学者の増加とともに、医薬分業の推進により薬剤師として働くことの魅力が増加したためと思われる。また修了生に占める女性の比率は平成6年(1994)までの19%から、その後の10年間で約2倍の37%に増加した。女性の社会進出を反映していると思われる。就職先は、関東(37%)、富山(23%)、関西(19%)の順であるが、全国にわたって分布している。

大学院博士課程後期については、198名の博士を送り出した。昭和55年度(1980)から平成6年度(1994)までの15年間の修了者は79名であり、留学生が41名を占めた。就職先は主として製薬会社(28%)であったが、留学生の場合は、多くが母国の大学教員や研究所の研究員として活躍している。最近10年間の進路状況を見ると、修了者119名のうち留学生が76名を占めた。出身国は、中国、韓国、タイ、ベトナム、インドネシアなどアジア諸国からの留学生が多く、本学の国際交流の特色を反映している。就職先については、製薬企業(20%)に就職する学生の比率が高いが、低下してきている。一方、病院、薬局・流通、博士研究員(ポスドク)として大学や研究所に就職するケースも増加し、職業選択が多様化している。留学生については、母国で活躍している。また修了生に占める女性の比率は平成6年(1994)までの20%からその後の10年間で約28%に増加した。

なお、平成16年(2004)の学校教育法の改正により、平成18年(2006)度入学生から薬剤師養成のための薬学教育の修業年限が4年間から6年間に延長される。このことにより、薬学部は、「薬学科」(6年制課程:定員55人)と「創薬科学科」(4年制:定員50名)の2学科となる。それぞれ薬剤師(薬学科)と創薬研究者(創薬科学科)の養成を主目的とするので、卒業・修了者の動向も大きく変化することが予想される。

3) 医学部看護学科

医学部看護学科は平成5年に新設され13年目を迎えた。昨年度は9回目の卒業生を送り出し、同じ学舎を巣立った学生は3年次編入生を含め、総勢610人となった。うち男性看護学生は15名である。平成15年からは、助産専攻コースが設置され、開設時の平成15年度には9名が、次年度にあたる平成16年度には7名が、平成17年度は9名が助産専攻コースを選択している。

保健師、助産師、看護師の国家試験合格者数は、過去9年間で、編入生を含む保健師国家試験合格者は578名(97.1%)、助産師国家試験合格者は16名(100%)であった。また、看護師

